



## ゆうすいの詩集 2

さくらじまゆうすい

## 自分に正直に生きてるかい

---

自分に正直に生きてるかい

声に出して言ってごらん

声に出さなきゃ伝わらないから

うまく言葉にできなくても

つたない言葉で充分だから

君の声を聞かせてよ

僕の声は聞こえるかい

何も励ましてあげることができなくても

お互いの気持ちが伝わるから

けどこんなこともある

うそだらけの言葉に傷つけられて

僕も巧みなうそを見抜こうとする

すぐにばれるよううそをついて

困るのは自分の方なのに

こんなうそだらけの世の中に見えて

本当のことだけが残されていく

誰もまがい物など欲しくはないから

当然といえば当然だよ

僕は言葉を選びながら

君には本当のことを伝えようとしている

その言葉が誤解されているなら

僕は孤独を感じさせられる

人は誰もが明日をも知れぬ命

一瞬一瞬を後悔しないように生きているか

誰かを不幸にさせてはいないか

自分自身を不幸にさせてはいないか

人は生きていると戸惑うことばかりで

自分の道も自分で決められない

最近笑顔でいられなくなったと

自分でも気が付いている

鏡が気になる

今、僕はどんな顔をしているのだろう

人に会ったらまず顔を見る

心の中まで見えないから

外見だけで人を判断する

これって仕方がないことだけど

もっと自分の心を知ってほしい

もし本当の僕のことを信じてくれたなら

あなたを裏切るようなことはしないから

時々こういう人もいる

言葉巧みに相手を誘う

やっぱり話のうまい人にはかなわない

でも正直に話してくれると安心する

この人の言うことなら信じてもいいと思う

うそはいつか見抜かれる

うそを見抜くたびに自分の方がつらくなる

僕もそんなにバカ正直に生きているわけじゃないけど

本当の商売上手は正直な人たち

嘘ばかりついでると後悔することになる

今まで生きてきてそれくらいは学んだ

正直に生きていればお金持ちにはなれなくても

何も困るような生き方はしないで済む

嘘ばかりつくことで困ったことばかり起こることを

気が付かずに生きていることは何よりも不幸だ

もっと僕のことを信じてほしいけど

身近な人ほど僕のことを侮っている

僕はそんなに寛大な人間じゃない

いやな人間とはさっさと縁を切りたい

これからもそんな僕の生き方は変わらない

もしうそを人が許してくれたとしても

うそをついた自分自身を腹の底では許せない

うそをつくことで自ら不幸の種をまいている

うそをつくことで自分を苦しめていることを知らない

正直さや優しさが

かえって人や自分を傷つけているという人もいる

でも本当に正直さや優しさが

毒になると証明した人はこの世にいない

人は優しさを見せることで

人から騙されやしないかと恐れている

でもそんな人を疑う心が

かえって自分を苦しめているとやっと気づいた

世間では正直で優しい人間は

不幸になると信じている人が多い

でもそれが本当のことなのか

確かめる勇気のある人はいない

人は人を変えることはできない

人ができることは知らないことを教えてあげることぐらい

自分が自覚しなければ

自分を変えることなどできはしない

だから人は自分の思い通りにはならない

人が人を変えようなんてしない方がいい

そんなことをされれば何か裏切られたような気がする

人から騙されるたびに傷つき

自分自身のことにも信じられなくなる

人を恨んだり憎んだりしたくないのに

人と関われば恨みや憎しみがこみあげてくる

人にやさしくしたいのに

恨みや憎しみが邪魔をする

人から騙されるたびに

人に会いたくないと殻に閉じこもる

誰を何を信じていいかわからない

だから誰も自分自身も信じられなくなる

昔の僕は人を笑わせていたのに

人も僕も笑わなくなった

人を笑わせていた道化のころの僕は

自分自身が嫌いで仕方がなかった

いつも人から馬鹿にされていた

今は自分の生きたいように生きている

気楽な独りの方が楽でいい

人を信じられない僕には丁度いい

人から見れば僕は世の中の敗北者だろう

誰とも何も戦いたくない

だから敗北者の方が僕には合っている

人に勝とうなんて思わない方がいい

自分の幸せは人との比較でしか測れない

僕みたいな負け犬を見てみんなが幸せをかみしめてくれる

僕は負け犬でみんなは幸せな人々

世の中それでうまく回っていればいい

負け犬には負け犬のプライドがある

僕は負け犬になったことを誇りに思いたい

何も恥ずかしい生き方はしていないからだ

負け犬は負け犬なりに人生を楽しんでいる

これ以上欲しがればエゴでしかない

それでも家族との関係で悩んだりする

僕の家族は理想の家族からは程遠い

家族同士で傷をつけあうのが当たり前になっている

親の悪口を言う人間はろくな人間じゃないと人は言う

確かに僕はろくな人間じゃない

まともに人との付き合い方も知らない

友達だと思っていた人間も次々と去っていく

これは自分が悪いのだから仕方がない

もうできるだけ世間に興味を持たないことにしている

知り合いに会ってもよくシカトされる

人間だけでなく食べ物にも最近興味がない

ただ生きていくためだけに食べているだけ

眠りたいときに眠り出かけたときに出かける

今の生活は自由そのものだ

幸せの代わりに自由を手に入れた

僕はただ自由に生きればいい



僕は生きたいように生きればいい

人は僕のことをいろんな言葉でけなすだろう

人は人

僕は僕

自由でいい

# 鹿児島

---

## 鹿児島

鹿児島は不思議な歴史を持っている

神話の時代には神々が住まれる土地だった

しかし、後の世には熊襲が大和朝廷に盾をついている

関ヶ原の合戦では西軍に味方したのに

外様大名では異例の七十七万石

鹿児島と宮崎南部の土地を任された

幕末になると薩長同盟で明治維新を成し遂げたのに

その十年後ぐらいには西南戦争を起こしている

鹿児島は正義でも悪でもない

ただ日本の歴史を語る上では欠かせない土地である

反骨精神というのだろう

しかし現代では反骨精神などなくなり

鹿児島はただの辺境の土地になった

昔みたいにこれといって偉人も現れない

全国画一的な教育や文化に変わったせいもあるだろう

東京や関西にはとてもかなわない

鹿児島は再び歴史の表舞台に出てくるだろうか

鹿児島県民であることを誇りに思っているのだろうか

県民一人一人の自覚と協力が欠かせないだろう

君を幸せにするから

---

君を幸せにするから

意外と一途な僕です

気が多いのは確かだけど

本当に愛し合えるのはあなただけ

君の名前を見るだけで胸はときめく

女友達はいるけれど

浮気なんてしたことないよ

君はジェラシーばかり僕にぶつけてくるけど

愛の言葉をささやくのは君にだけ

だから僕を信じてほしい

僕のささやかな夢は普通に結婚して

普通の家庭を築くこと

その未来のビジョンに君は欠かせない

仕事なんてできない僕だから

貧乏な暮らしになるかもしれないけど

それでも君は僕についてくるかい

君となら幸せになれそうな気がする

いい加減に生きてきた僕だけど

君と出会ってから真面目になった

僕は親を困らせながら生きてきたから

子供たちには苦労させられるんじゃないかな

その時は君が子供たちを守ってほしい

やっぱり子供たちには父親より母親の方が大事だよ

君次第で子供たちの人生も変わるから

それだけは心得ていてほしい

でも僕も君のことを守るから

困ったときには僕に何でも相談してほしい

でもお互い隠し事はあってもいいと思うよ

僕は君の携帯を無断でのぞいたりしないから

君には君の付き合いがあるからね

友達に会いたくなったら出かけていいよ

ただ、男と二人っきりで会うのはやめてよね

君には僕を選んでよかったと思わせてあげるよ

君と一緒に世界一幸せな家庭を築こう

貧乏でも君がついてきてくれるなら

僕は君を幸せにすることを誓うよ

## ゆうすいの詩集 2

<http://p.booklog.jp/book/58197>

著者：さくらじまゆうすい

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dpmpct5160/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58197>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58197>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ